

[ 普及事項 ]

新技術名：モモ「川中島白桃」の大玉生産のための着果管理（平成12～13年）

研究機関名 果樹試験場 鹿角分場  
担 当 者 船山瑞樹

[ 要約 ]

モモ「川中島白桃」は、摘果作業を満開後30日から始め、成木における着果量を幹周1 cm当たり5果程度にすることにより、大玉生産できる。

[ ねらい ]

近年、県内のリンゴ産地において、樹種複合化の一環としてモモの導入が進められている。しかし、冷涼な気候条件やリンゴとの作業競合によるモモの摘果作業の遅れなどにより、収穫果は小玉傾向にある。

そこで、主力品種である「川中島白桃」の大玉生産を可能にするために、摘果時期及び着果量を検討し、適正な着果管理方法を確立する。

[ 技術の内容・特徴 ]

- 1．摘果時期は、着果数を幹周1 cm当たり5果に調整した条件のもとで、満開後30、45、60日で検討した（試験1）。着果量は、摘果時期を満開後40日とし、幹周1 cm当たりの着果数で検討した（試験2）。
- 2．摘果時期については、満開後30日に仕上げ摘果を行うと、果重は最も大きくなった。高単価が期待できる310 g（16玉）以上の果実の割合は55.6%と最も高い（表1、図1）。
- 3．着果量では、幹周1 cm当たり3果区の果重が最も大きくなった。310 g以上の果実の割合は、59.2%と最も高く、果実の糖度も高かった。しかし、10 a当たりの収量は970kgで最も低く、収量性、及び、収穫果の大きさ、果実品質等から総合的に判断すると、幹周1 cm当たり5果程度の着果量が最も適当である（表2、図2）。

[ 普及対象範囲 ]

県内モモ園地

[ 普及・参考上の留意事項 ]

- 1．川中島白桃は花粉がないため、結実が不安定になりやすく、満開後30日以前には摘果を行わない。
- 2．花粉のある品種に対しては、摘蕾や満開後20日頃に予備摘果を行い、肥大を確保する。
- 3．幹周が30cm未満の若木に対しては、着果量を3～4果/cm幹周とする。
- 4．県南部など生育が旺盛な地域では着果量をやや多めにする。

[ 具体的なデータ等 ]

< 試験 1 >

表 1 摘果時期と果実品質及び収量 ( 斜立主幹形、9年生樹、収穫日平成13年9月10日 )

摘果時期 (満開後日数)	果重 (g)	着色 <sup>z</sup>	地色 <sup>y</sup>	硬度 (Kg)	糖度 (%)	pH	食味 <sup>x</sup>	収量/10a (Kg)
30日	331.5	1.6	2.2	1.2	16.1	4.8	3.7	1402
45日	310.5	1.6	2.1	1.2	16.3	4.8	3.9	1465
60日	305.3	1.5	2.7	1.2	16.5	4.9	3.9	1425

<sup>z</sup>多3, 中2, 少1。 <sup>y</sup>黄5, 淡黄4, 乳白3, 白2, 緑白1。

<sup>x</sup>上5, 中~上4, 中3, 中~下2, 下1。

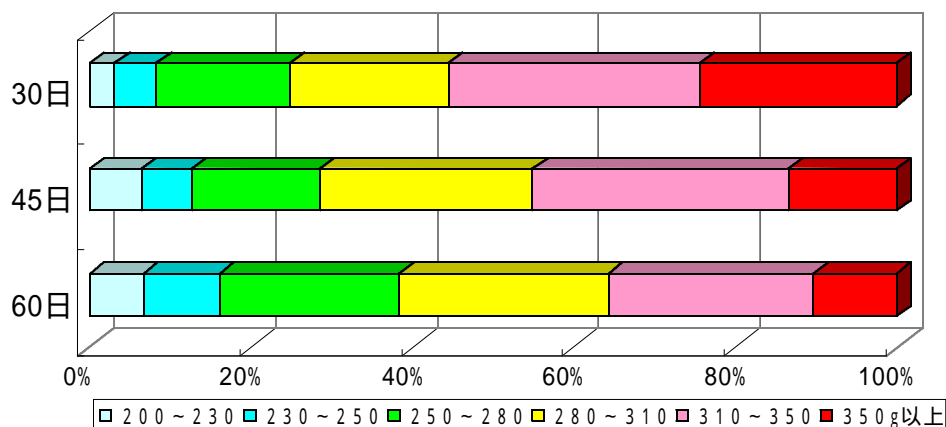


図1 摘果時期と収穫果の果重分布

< 試験 2 >

表 2 着果量と果実品質及び収量 ( 斜立主幹形 8年生樹、収穫日平成13年9月10日 )

着果量 <sup>z</sup> / cm幹周	果重 (g)	着色	地色	硬度 (Kg)	糖度 (%)	pH	食味	収量/10a (Kg)
3果	326.6	1.7	2.4	1.2	17.6	5.0	3.9	970
4.5果	305.1	1.6	2.4	1.2	16.4	5.0	3.7	1636
6果	297.7	1.8	2.4	1.1	16.2	5.1	3.5	1861

<sup>z</sup>幹周は地上から20cm上部の主幹部を測定。

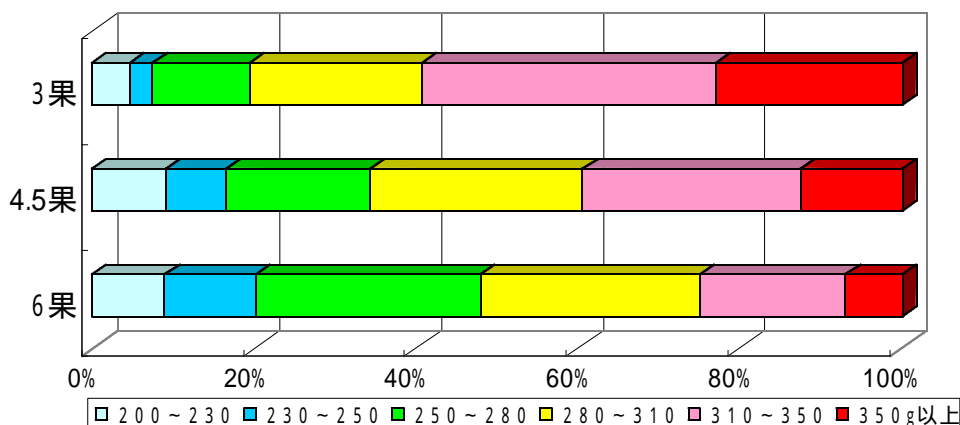


図2 着果量と収穫果の果重分布

[ 発表文献等 ]

第46回東北農業試験研究発表会 ( 発表予定 )